

## ディスカッション

司会・坂井弘紀（所員/表現学部准教授）：今日はたいへん盛りだくさんで、地域的にも中国、中央アジアを経て、コーカサス（カフカース）地方ということで、まさにシルクロードの東西を横断する地域がテーマになっておりました。報告していただいた方々を交えてこれからお話をしていくこととなりますが、その前に、まずフロアーの皆さんから質問を二、三、いただいて、それにお答えいただいた後に、ディスカッションに入ろうと思います。

### ——フロアーからの質問、応答

司会：最初に中央アジアのイスラーム復興に関する、小松先生のご報告に関連しまして、質問等ございましたら、挙手にてお願いします。

参加者1：和光大学の4年生です。最近、イスラーム過激派の話がよく出てきて、一括りにされていますが、内容のバリエーションや、組織の数がどのくらいなのかなど、分かっているのでしょうか。

小松：イスラーム過激派やイスラーム原理主義者など、日本のメディアでも一括りにして語ることが多いです。中央アジアにおいても同じように、特に政権の側が、イスラーム原理主義者、あるいは土地の言い方では「ワッハービー」という名前で、一括りにして語ることが多いです。ワッハービーという言い方は、かつてサウジアラビアで厳格な教義を主張して国家をたてたワッハーブ派にちなんでいます。

それに対して、そう呼ばれる人々は、果たして本当に一様なのかというと、実は多様です。たいへん敬虔で、イスラームの戒律に則



って生きていこうという人から、イスラームに関して深い知識はなく、ましてやアラビア語も読めないにもかかわらず、イスラームという言葉を使って自らの政治的な野心を追求するような人々まで、たいへん幅が広いのです。あるいは海外からの、いわばグローバルなイスラーム復興主義思想に同調して、そういう組織に入る人もいますし、極めてローカルなセクト、宗教団体をつくっていく人もいたというように、たいへん多様です。

その人数に関しては全く情報がありません。しばしば政権側が「過激派」や「ワッハービー」というレッテルを張る人々の中には、別にそういう運動に関わっていないくても、いわゆる反体制的な立場の人、あるいはそういう可能性のある人まで含まれてしまうこともあります。ですから、こういう言い方はそもそも相対的な言い方なので、けっしてそれを実態として理解してはいけないと思います。

**参会者2：**ウズベキスタンは独立当初、とてもアメリカや西欧寄りな政治展開をしていたと思うのですが、2005年以来、非常にロシア寄りの政治になっているように見受けられます。ただ、先生が今日もおっしゃったように、イスラーム教に焦点をおいた民族主義的なことも政治的に行なっているようですが、現在のウズベキスタン政権はこれからもロシア寄りの政治展開を目指しているのでしょうか。それともロシアの援助を利用しつつも、独自の政治体制を展開しようとしているのでしょうか。

**小松：**ウズベキスタンの場合は確かに、独立以降はロシアからの距離をおいて、かつできれば中央アジア諸国における統合の中心としてウズベキスタンを位置づけていこうという立場が鮮明でした。ウズベキスタンは人口の面で中央アジアで一番多く、また、他の4つの中央アジアの国々すべてと国境を接しているという、まさに中心に位置しているからです。

そういう理念を掲げて登場したのですけれども、その後しばらく経って、ウズベキスタンの経済状態が徐々に悪化していきました。他の国々、たとえばカザフスタンが経済的にも繁栄していくのに対して、ウズベキスタンはあまり大きな経済改革を行なわなかったがために徐々に経済の停滞があらわになってきました。

一方で、カリモフ政権は民主化や人権の面で欧米から批判を受けることが多くなっていきましたが、たまたま9.11以降、アメリカもまたアフガニスタン戦争、対テロ戦争を遂行する上でウズベキスタンと提携する必要性が生まれたので、しばらくの間、アメリカはあまり民主化や人権のことを言わずにウズベキスタンと提携するようになったのです。ところが2005年のアンディジャン事件を一つの契機として、双方の関係が悪化してしまいました。そして、ウズベキスタンとしても、特に経済面でロシアと提携していくことが必要になってきました。アンディジャン事件のときも、ロシアは当初からカリモフ政権を支持していました。そう

いう事情もあって、ロシアとの関係を強めていき、逆に欧米との関係が急速に冷却していくという流れになりました。

これは初めから既定の方針があってというより、状況に応じて方向を変えていく傾向が強いので、今後どうなるかはなかなかわかりません。そもそも、カリモフ政権自体がいつまで継続するかということも実は不透明で、この先この政権の行方はわかりませんが、注目していく必要があると思います。

司会：どうもありがとうございました。次にタジキスタンの現在を報告してください。島田先生に対する質問、あるいは事実確認等を受けたいと思いますので、挙手でお知らせください。

参会者3：ロシア語とタジク語の使用比率はどのような感じなのでしょう？ タジク語がほぼ7～8割いっているのですか？

島田：タジキスタンにおけるロシア語の使用比率ですが、ソ連時代には当然ロシア語教育が徹底されて、多くの学校でロシア語教育が行なわれていました。しかし現在では、学校教育でロシア語は必須科目ではありますが、ロシア語だけで教育が行なわれているわけではありません。使用頻度につきましては、たとえば、ソ連時代に教育を受けた人はほぼ例外なくロシア語を使うことができます。役所などでもまだソ連時代に教育を受けた人が多いので、ロシア語を使っている比率も高いです。公用文書などもロシア語で出されることもあります。

たとえば、タジキスタン外務省は、タジキスタンに駐在している外交団とのやり取りなどでは、間違いなくロシア語を使って仕事をしています。

街中では、タジク語を聞く場面が多いのですが、それでも、ロシア語だけで生活ができないという状況ではないと思います。ドゥシャンベでは外国人がロシア語だけを使用して十分に生活できるほどロシア語が通用しますし、現在でも使われている状況です。

参会者4：二つおたずねします。一つは、先ほど北部と中部の対立というご説明がありました。この対立のポイント、何を巡って対立しているのかということが一つの質問です。

もう一つは、先生のお話からは少し外れるかと思うのですが、以前話題になったアイハムムという遺跡の発掘が行なわれていたと思いますが、それは現在どのような具合でしょうか？

島田：まず一つ目のご質問についてですが、先ほども少しふれましたが、ソ連時代には共産党の幹部が北部出身者が占められることが多かったのです。しかもそ

の共産党の支配時代に、山がちな土地の中部に住んでいる人たちが国内のほかの地域に強制的に移住させられまして、平野の未開地で農作業などに従事させられたという背景があります。そのことで、中部出身の人たちは共産党政府に対していいイメージをもっていませんでした。そういうこともあって、これら二つの地域が対立することになってしまいました。先ほどのお話では、二つの地域しかあげませんでしたけれども、実はそのほかにもいくつかの地域間、地域グループがありまして、それらが互いに利害関係をめぐって対立していました。

二つ目のご質問で、アイハヌムという遺跡についてですが、確かアイハヌムという遺跡自体は、川を越えたアフガニスタンの領内にあります。アフガニスタンの領内ですけれども、本当にアム川沿岸のすぐそばであったと思います。

タジキスタン側にも、アイハヌムのような考古遺跡がいくつかあります。例えば、アイハヌムの時代とは異なりますが、アジナ・テパという仏教遺跡がありまして、これは、7～8世紀の遺跡ですけれども、12メートルもの大きさの涅槃像が出土したことで知られています。そこなどでも、現在ユネスコが中心となって遺跡の保存作業を行なっています。

参会者5：和光大学の大学院生です。内戦にかかわっての質問です。政治集団の対立があったとお話を聞きましたが、その政治集団の対立の関係性が少し混乱しているの、もう少しご説明ください。

ご講演の中では、旧共産勢力あるいは旧政府勢力とイスラーム勢力などのイデオロギー的な対立というよりは、地域主義的な対立であるとのことでした。ソ連統治時代に北部の出身者が政府主流となって、地方では、住民の強制移住なども行なわれた。なぜその移住が行なわれたのでしょうか。地域主義的な対立といわれるにしても、やはり統治理念といえますか、地域主義的な対立の核となる部分は何であるのかということ、知りたいと思います。

そのつぎに、ラフモン大統領は、そうした対立を乗り越えるために、どのような統治の理念を示したのか。それが成功しているという話をお聞きしました。タジキスタンの民族構成はタジク人が64%のほかに、ウズベク人、ロシア人なども相当数の民族集団として抱えている、多民族国家といえます。ですから、この民族関係も地域主義的な対立と関係しているのか、どうか。

ちなみにラフモン大統領は、タジク人に属するようで、そういう意味での民族主義的な傾向と受け取ることはできるのでしょうか。

島田：非常に難しいご質問をいただいたのですが、先ほども申しあげましたように、内戦の背景には、それぞれのグループのさまざまな面での複雑な利害関係がありました。その一つ一つを検証していく必要があるのですが、現在のところではわかっていない部分が多いと思います。

現地の人と話をしているよく聞くことは、とにかくもう内戦に疲れてしまった、早く戦いを止めたいのだけれども、そのきっかけがないからやめられなかったということでした。ラフモン大統領が内戦を収束させることができたのは、そういう当事者間の本音をうまく汲み取って、それで交渉のテーブルにつかせたということだと思います。どのような理念に基づいてそういう行動を取ったのかといわれますと、少し答えに窮するところではあるのですが、とにかく当時すでにラフモンは大統領でしたので、国内の政治的混乱を収束させるということが国家元首としての役目でもありますから、そういう動きに出たのではないかと思います。

また、タジキスタンの内戦の特徴の一つとして、ユーゴ内戦のように民族間の対立に至らなかったという点があります。全人口の約3分の1はタジク人以外の民族ですが、内戦中は民族ごとの集団にわかれて対立することはなく、この点からもタジキスタンの内戦は地域主義的な対立という性格が強かったのではないかと考えられます。

司会：次は、アルメニアについてご報告をいただいた吉村先生に対する質疑をいただきたいと思います。

参会者6：テル＝ペトロシアン前大統領は、今何をなさっているのですか？

吉村：政治活動は続けていて、事実2008年2月の大統領選に立候補しているのですが、あまり人望がないので、大統領にまた選ばれるようなことはまず考えられません。

#### ——ディスカッション

司会：今回の公開シンポジウムのタイトルを改めて見てみますと、『「シルクロード」は、いま』となっております。僭越ながら、このタイトルは私がつけたものですが、「シルクロード」にカギ括弧がついております。これにはいろいろな意味があります。その下に、「中央ユーラシア」という言葉も同時にあります。

ここにいらっしゃる講演者の方々は、この地域について第一線で研究されている先生方です。中国西部からコーカサスまでのこの地域が、どういうところかということをまず知らなければなりません。「中央アジア」といっても、学生にアンケートで、「中央アジアの知っている国を書きなさい」と言いますと、アフガニスタン、インドというあたりでしたらまだいいのですが、インドネシアなどを挙げますので、この地域をすぐに連想させることは、なかなか難しいことだと思います。もっとも、現在の学生たちのいろいろな地理知識という問題もあるのかも知れません。

一方、「シルクロード」と言いますと、それぞれが思い浮かべる姿はさまざまであるとは思いますが、案外話が早いのです。ですから私もなるべく、シルクロードに関係することをやっているということにしています。

地図 (p.005) のタイトルを「中央ユーラシア」としましたが、これはおそらく世界で最初の、この地域に特化した事典であると思われる『中央ユーラシアを知る事典』<sup>(1)</sup>を参照して作成いたしました。「ユーラシア」というのは、ヨーロッパとアジアを合わせた合成語です。一般的には、「ユーラシア大陸」と理解されることが多いわけですが、ことさらなぜ、「ユーラシア」という言葉で言うかと申しますと、ヨーロッパとアジアの接点であり、両方が入り混じっている地域でもあると言えるのではないかとと思われるからです。

「中央ユーラシア」という言葉はまだまだ市民権を得ていませんし、私はこの言葉を積極的に使えと言うわけではありません。かつて、「シルクロード」という言葉を巡って研究者の間でいろいろな意見がありました。シルクロードというと、「ロード」つまり「道」ですから、通り過ぎてどこかへ行ってしまうという感じがしかねません。もちろん、シルクロードという言葉が表す東西交流あるいは南北交流というものの意味は重大ですし、それはこの地域の特徴の一つです。けれども、このシルクロードという言葉に、一般の人が想像するような東と西をただ結ぶだけのぼんやりとしたロマンチックな地域というイメージだけでなく、この地域に根付いた視点、この地域からの見方を、たとえば現地の言葉を利用して、もっと深めようではないかという意見が出されたりしました。

日本でのこの地域の研究は、近年たいへんめまぐるしい発展をしています。明治以降、現地語の資料を使った研究成果もあるので、そういった蓄積が今回のシンポジウムにもつながっているのです。この地域があまり知られていない分、何とも複雑で、一言では表せないような地域概念といったものがあるということを、まずご理解ください。

今回は、司会者からそれぞれの講演者の方々にお話をうかがう形で進めたいと考えております。

まず、4人の講演者の方々にうかがいます。この地域は、たいへん短い期間にとっても大きな変化を経ました。たとえば中央アジアではソ連が崩壊し、大きな<sup>たが</sup>箍が外れた結果、バルト三国と違って、あまり独立したくない雰囲気もあったのですが、独立国家という形になりました。あるいは、中国では、改革・開放政策の流れで、資本主義的な発展を急激に進めるようになりました。

ソ連と中国という違いはありますが、似たような時期にこうした大きな変化があることは、講演の中でも触れられた通りです。このシンポジウムのタイトルは、『「シルクロード」は、いま』ということですので、そういった変化を経

(1) 小松久男ほか編『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、2005年。

て、今現在、この地域がどういう形をしているか、どういう状況であるかということ、それぞれの先生の視点やお考えに基づいて、おひとりずつお話しください。

小林：中国は、改革開放以降も政治路線が「右」や「左」に大きく振れ、混乱を抱えながら経済発展をしてきたといえます。基本的な政策の根幹部分も、この20～30年の間にずいぶん変わってきました。それを逐一お話しする時間がありませんので、最近のことに限って、どういう点が変わったのか、私なりに感じていることを申します。

中国の政治的観点からの流れを、1970年代の後半から1990年代まで見てきますと、90年代の後半あたりからずいぶん様相が変わってきています。これは何かというと、市場経済の原理を社会主義の中に導入しようという試みが、さまざまな面で波紋を投げかけてきたことによるものです。

いろいろと変化はありますが、会社の経営者が共産党の中に入れるようになったことは大きな変化です。このような方針の転換は、経済的な力を持った集団やその幹部、経営者たちが、中国において相当な影響力を持ってきたことによるものだと思います。この人々を抜きにしては、中国の舵取りができなくなってきたということです。

しかしながら、経営者が共産党の中に入ることは、やはりどうしても、考え方として無理があるはずで、それを断行してきたことが、今の中国が抱える矛盾でもあり、あるいは実際の政策の特徴を端的に表す一つの現象であると思います。なかなか理論的には語れませんし、うまく説明がしきれません。けれども、とりあえず今のところは、理論的に矛盾だらけのはずですが、一応それなりの経済成長を達成しつつあります。ここ数年においては、不動産を巡る立ち退き問題などの社会的混乱はありますけれども、国家を揺るがすほどの極端な大混乱を生じることもなく進んでいます。

なお、個人的な体験で申しますと、チベット地域の人々の意識はずいぶん変わってきたと思います。新疆あたりはチベットとずいぶん違うと思いますが、チベットでは水面下で独立運動につながる行動や発言をしていた人の中にも、青蔵鉄道などで経済的な成功の機会を得て、従来とは違ったスタンスで行動したり語ったりする人がいます。あるいは、相変わらず中国の政治には批判的でありながらも、自らはどっぷりと中国の体制の枠組みの中に入ってしまった人が多いことを痛感しています。そのような動きは、果たして他の地域にも波及するのか注目しています。

小松：変化といえば実にさまざまな変化があり、限りがありません。しいて思いつくことを二つだけ申し上げます。

一つは、中央アジアの五つの国々の形や特徴が、たいへん多様化しているとい

うことです。

ソ連の時代にはあまり情報がなかったということもあり、中央アジアというと、一まとめにして大体均質なものであるかのような印象を持っていました。しかし、1991年の独立以降、五つの国々の地理的な位置や資源のありようなど、さまざまなことが関係して、それぞれの国々の形が変わってきたと思います。たとえば、各国の首都の空港に降り立つと、まったく違った雰囲気を感じます。はたして中央アジアはこれからどうなるかと考えると、そうとう多様性に富んだ地域になっていくだろうということが、直感的な感想です。

もう一つは、私が中央アジアに行くようになったのは、1991年、ソ連が解体するところからです。それから現在までの17年ぐらいの間に、人々の気風、特に世代間の違いが明らかに増えてきたように思います。

1991年当時はまだソ連の最末期ですけれども、多分に古風な感性や立ち居振る舞い、道徳などを感じたものです。たとえばウズベク人の場合でいうと、ドッピという小さな四角い帽子をかぶったり、女性は色鮮やかなワンピースの民族衣装を着ていましたが、最近ではほとんど見かけなくなってしまいました。ウズベク人自身も語っていますが、やはりソ連解体以降、諸外国との関係が緊密化し、いろいろな情報が入ってくる中で、とりわけ世代間の差が相当大きくなってきたことが、もう一つの私の印象です。日本でも世代間の断絶が言われていますが、まさにそのような状況が中央アジアでも起こっています。私たちの慣れ親しんだ人々とは違うタイプの人々が出てくる可能性も、大いにあると思います。

島田：今、小松先生がお話しになったことと重なる部分が多いのですが、やはり中央アジアと一口に言いましても、五つの国がありまして、現在ではそれぞれの国が独自の発展を遂げつつあります。政治的にも経済的にも格差が大きくなってきているという点が、非常に印象的です。

1991年にソ連が崩壊しまして、中央アジアの五カ国もコーカサスの三カ国も同時に独立したのですが、その後16年を経た現在では、それぞれの国々の経済状況なども格差が出始めています。たとえば中央アジアで言いますと、カザフスタンなどは今、石油の景気でもかなり経済発展しているという状況で、物価もものすごい勢いで上昇しているようです。それに対して、タジキスタンあるいはキルギスもそうかも知れませんが、資源のない山国は依然として貧しいままという状況が続いています。

小林先生のお話にもありましたように、中国では市場経済化が進められていて、大きなうねりが続いているということでした。中央アジア地域でも市場経済化は行なわれているのですが、その度合いもまた国によって違いがあり、あるいは民族的なメンタリティにも関わってくるのかも知れない、そんな違いが出てきていると思います。



中央アジア地域は中国と違いまして、これまで歴史的に資本主義をほとんど経験したことがない地域です。ソ連時代の社会主義の後、ソ連が崩壊していきなり市場経済化といわれても、現地の人たちはどうしていいのか分からない状況にあるのではないかという印象を受けます。中にはカザフスタンのように、うまく市場経済化に適応して経済発展を遂げている国もありますが、タジキスタンのようになかなか市場経済化の進まない国もありますので、今後どうなっていくのか、注目すべきと思います。

吉村：中央アジアも、各国が独立してから十数年経つと国情がまちまちになってきたように、コーカサス三国もグルジア・アルメニア・アゼルバイジャンでは、それぞれの国情も大きく異なっています。

アゼルバイジャンのように、石油利権のおかげで長期独裁政権が維持されるようなところもある一方、グルジアは内戦で深く傷ついて、経済がなかなか上向きませんでした。そして、サーカシュビリ政権のように親欧米の政権ができて、西側から援助が来るようになったので一息ついたかと思えば、他方ロシアとの緊張が高まっているために政権の独裁化が進むという問題があります。あるいはアルメニアの場合であれば、親西欧の一方でロシアとの繋がりも断ち切ることはできず、どっちつかずという状態と、いろいろあるわけです。そこで、ここではアルメニアの話だけにさせていただきます。変化として、アルメニアの場合にはっきり分かるのは経済体制です。

アルメニアの場合には、社会主義から市場経済への転換に非常に熱心に取り組みつつ、インフレを無理やり押さえ込むために徹底した緊縮財政を行なったために、年金生活者は非常に苦労したという話が伝わっています。逆に対外的には、IMFや世界銀行から市場経済化の優等生と絶賛されました。

そのように大きく経済体制が変わったわけですが、だからと言ってソ連時代にあった工業が復活したかという、それはまったくありません。産業の復興事業はまだまだこれからという状況であります。

さらに先ほどのお話でかなり取りあげましたが、外国のアルメニア人との交流が盛んになり、外国の同胞からの援助、さらに文化的・社会的・人的な交流というものが盛んになりました。たとえば、世界中のアルメニア系住民がエレヴァンに集まり、オリンピックみたいなことをする全アルメニア競技会という行事もあり、いろいろ問題があるとはいえ、外国の同胞との交流は、それなりに盛んになっています。

こういうところが大きく変化したところですが、一方で、変わらないところというのも当然あります。たとえば、政権のある種の言論統制などは、かつてよりも緩められたとはいえ、まだ行なわれています。

アルメニアの場合、さすがに、露骨な検閲は影を潜めましたが、テレビ統制は

まだあります。テレビで政権に批判的な報道をする放送局に対して、免許取り消しということをやっています。新聞などの活字メディアが論説などで政権批判することは許されるのに対し、国民に直接的な影響のあるテレビだけは、政権がしっかり押さえているという状況です。

さらに、アルメニアにとってロシア依存は、なかなか変わることはできないということです。これには、ナゴルノ・カラバフ紛争が深く影を落としています。アゼルバイジャンおよびその兄弟国であるトルコの両方から経済封鎖を受けているので、山国であるアルメニアにとって、製品を輸出するには必ずイラン経由かグルジア経由となり、海に出す前に時間と費用がかかってしまうということが、アルメニアの輸出産業にとっての大きな足かせになっています。

さらに経済封鎖だけではなくて、当然ながら周辺国との軍事的な緊張がありますので、それをどこかの第三国に守ってもらおうと思うと、モスクワとの関係も断ち切ることはできません。さらに、経済がなかなか上向かないなかで最も手取り早いのは、外国に出稼ぎに出ることです。そのときに、ソ連時代にロシア語が普及していたということもありまして、ロシア本国に出るのが一番簡単な方法です。

このような条件のために、アルメニアが独立する直前の調査では380万人ぐらいいたというアルメニア人の人口が、その独立後270万人ぐらいに減ったと言われています。政府の統計ではそうになっていますが、実際の街の人たちの話を聞きますと、もっと少なくても、220万人ぐらいしか本国に残っていないのではないかと言っています。

もちろん全部がロシアに行ったわけではありませんが、多くがロシアで働いて、そこから本国に送金することで、経済が何とかまわっているという状況です。ですから、アルメニア本国の人口の3割はいわゆる貧困ラインを割っているのですが、それでも、どうやってかは知らないけれども皆が生活しているのは、そういう出稼ぎの人たちの本国送金に依存しているからだと言われています。本国が移民の送り出し地帯だという点は昔から変わっていないところです。

これだけ経済体制が変わってくると、若い人たちはそれなりに消費文明に慣れてきているということは当然あります。それでもまだまだ世界から少し隔離されたようなところがあるせいか、人々は非常にのんびりとした生活を送っています。そんなところは、まだソ連時代からあまり変わっていないのかなと思います。いつも道端でごろごろしながら、「仕事がないんだよね」と外国人に不満を一通り述べる人を、この十数年いつもエレヴァンの街で見かけます。

司会：ありがとうございます。このシンポジウムでは地理的あるいは心理的にも日本から遠い地域を扱っているわけですが、我々が住んでいる日本とは、今その繋がりが深くなっている時期であるといえます。日本からは中国の観光だけで

なく、たくさんの人々が、「シルクロードツアー」という形で出かけています。経済的な活動についても、ソ連時代や改革開放以前にはなかったような経済関係が生まれて、たくさんの企業や商社などが現地に進出しています。

また、留学生、あるいは研修生といった形で来日する人々も増えていると思われます。そうした中で、これらの地域と日本との関係はどうでしょうか。一言でいうのはなかなか難しいかもしれませんが、現状あるいは問題点と、もし可能であれば展望を、簡単にお話してください。また小林先生からお願いします。

小林：中国と日本との間には、私たちの日常生活においても、さまざまな関わりが見出されます。たとえば食料品の問題など、今年になってマスメディアで大きく報道されました。経済的な面に着目しますと、中国はそれなりに無難に推移していますが、日本や欧米諸国が経験したような株の大暴落を、どん底まで下がって立ち行かなくなるところまではまだ経験したことがありません。いつそういう事態が訪れるかもわからないという不安をはらみつつ、第11次5カ年計画などで出される目標は、すべて中国が経済的に安定成長するという仮定のもとでつくられているわけです。ですからその根底が崩れた時には、中国政府の舵取り自体も、中国における外資との関係のみならず、我々日本の経済に与える影響も極めて大きなものがあると予想されます。具体的に申しますと、たとえば株式などについては、日本の私たちも中国の株を所有すると同時に、中国側も日本企業の株を所有していますし、あるいは現地に日本の工場もありますので、本当にお互い抜き差しならない関係になっていると思います。

なお私の研究分野との関係に着目しますと、今中国は経済的な格差是正のために、先ほど紹介しました西部大開発をはじめとして、さまざまな大きなプロジェクトを実践しているのですが、それらの財源も基本的には経済成長を達成している中から出てきているものです。したがって、経済成長が崩れると、いま格差是正のためにやっている改革の枠組み自体も、極めて大きな影響を受けることになるでしょう。和諧社会を中国が推進していることは、今申し上げたような安定した経済的基盤の上にはじめて成り立つと言えるわけです。将来的に、万が一それが崩れた時にはどういう対策があるのか、中国の当局も恐らく不透明なのではないかと思えます。そういう事態を想定したくはないけれども、果



たしてこれでいいのだろうかと危惧される状況だと思います。

今日は観光開発に関してお話ししましたが、中国のシルクロード地域の観光客数が増えていることも、経済的な安定の上に成り立っているものでありますから、その基盤自体が今後継続しうるのかどうかについて、私も大きな関心を持って注目しております。

小松：日本との関係について話してみます。数年前に日本の研究者が世論調査の手法を用いて「アジア・バロメーター」という調査をアジア全域でやりました。アジア諸国の普通の人々の意見を集約したものです。中央アジアもその中に入っていました。中央アジアの人々が「自分達にとって重要な、あるいは好ましい国はどこか？」という質問票に対して答えた項目がありました。中央アジアの人々からみて、実感としてやはり重要なのはロシアや中国、あるいはトルコになりますが、日本もかなり上位にあって、好感度という点ではなかなか良かったと記憶しています<sup>(2)</sup>。

ただ、向こうの人によく言われることですが、日本はODAを中心にして、中央アジアの国々の独立以来、世界でも最も多くの支援を行ってきた国なのですけれども、現地ではなかなか日本の存在感が見えてきません。あまり日本人もいませんし、日本の企業が積極的に進出していくということも、他の国々と比べるとこれまでにあまりなく、やはり中国や韓国、あるいはロシアのバイタリティに、明らかに負けているというのが実際ではないかと思います。

日本のODAでは、中央アジアにたいへん多くの支援がされているのですが、一方で日本の国民にはなかなかそういうことが知られていないのではないかと思います。そしてまた、私の個人的な感想ですが、近年、日本全体として、何か内向きの傾向が強くなっていて、そういう新しく開かれた地域に対して経済も含めた関心そのものがあまりないのではないかという心配の種があります。

私などが直接接する機会が多いのは、やはり中央アジアからの留学生です。中央アジアでも、日本の支援や協力の一環として日本語教育に大きな努力が払われており、日本語のできる優秀な学生が輩出しています。彼らの話す日本語は日本人とほとんど変わらないぐらいで、欧米人にありがちなイントネーションの癖がまったくありません。日本語に対してたいへん適応能力が高いといえます。彼らが上げている業績も、日本の学生以上に高いのではないかと私は思っています。

こういった人々がしかるべきポストに就けるように、日本側もこれから大いにサポートしていく必要があります。そこが不十分ですと、せっかくの日本語や日本文化、日本に対する関心そのものが萎えてしまうというおそれがあります。中

---

(2) 関連情報：猪口孝ほか『アジア・バロメーター：都市部の価値観と生活スタイル：アジア世論調査(2003)の分析と資料』(第11章ウズベキスタン：ソ連崩壊後の現実)、明石書店、2005年。

中央アジアに日本のサポーターのような人々を育成していく上でも、より積極的な対応が必要だと考えております。

島田：日本とタジキスタンの関係については、現在のところ、あまり密接な関係がないのが現状です。日本側からしますと、日本の皆さんはまだまだ、タジキスタンについて、ほとんどご存じないということです。経済的な関係にしましても、日本の会社がタジキスタンと商売をすることも、まだほとんどありません。

一方でタジキスタンの側は、日本についてどのぐらい関心があり、どのぐらい知っているのでしょうか。私が住んでいる時に感じた印象ですが、向こうの一般市民のうち、ソ連時代に教育を受けた人達は日本についてある程度基礎的な情報は持っているようです。たとえば安部公房や三島由紀夫などの作家の作品がロシア語に翻訳されているので、それがソ連全土で広く読まれたこともあり、現在のタジキスタンの一般市民の中でも、それらの作家の文学作品を読んだことがあるという人々がいます。その他にも、ソ連時代にテレビで放映された、黒澤明の映画などを知っています。世代の差もあるかと思うのですが、私は黒澤明監督の映画をあまり見たことはないのですけれども、むしろタジキスタンの人達のほうがよく知っているということもありました。

現在タジキスタンで「日本といえば何を思い浮かべますか？」という質問をすると、まずタジキスタンの人たちが一番に答えるのは自動車だと思います。タジキスタンには日本車がたくさん入ってしまっていて、大体はドバイ方面から輸入されているようですが、トヨタや日産の車がたくさん走っています。しかもランドクルーザーをはじめ、高級車も多く走っており、トヨタの高級ブランドであるレクサスなどもよく見かけます。私は日本でレクサスをほとんど見たことがなかったのですが、タジクではそこら中をたくさん走っているのを見てとても驚きました。

先ほど出稼ぎ労働者のロシアからの年間送金額は10億ドルであるとお話しました。タジクの人々は、投資環境や市場経済などの経済的な基盤がまだ整っていませんので、入ってきたお金をどう使っていくのかよくわかっていないのではないかという感じを受けます。つまり、儲けたお金をどこかに投資してさらにお金を増やすという考え方ではなくて、お金を手に入れたらとりあえず何か買おうということで、高級な日本車を買ってしまうという状況にあるのではないかと思います。

タジキスタンと日本の関係はまだまだの状況なのですが、これからの展望としては、まずはお互いのことをよく知ることが大切だと思います。両者の関係は、一方的な関係だけでは成り立ちません。お互いがお互いを知ることが大切なのではないかと思います。

たとえば外交関係で申しますと、日本政府がタジキスタンに大使館事務所を開設したのが2002年です。タジキスタンが日本に大使館を開設したのはつい先日で

す。ようやく新しい駐日大使が赴任して、これから日本との外交関係を緊密にしていこうという状況です。ですから、まだまだこれから発展の可能性が開けてくるだろうと思われまます。

吉村：コーカサスと日本の関係については、状況はタジキスタンとほとんど変わらないか、それ以下です。まず、日本の大使館があるのはアゼルバイジャンだけで、グルジアやアルメニアにはまだありません。ですから当然ながら、日本の企業進出もまだ不十分です。もちろん、石油関係については別で、アゼルバイジャンとの結び付きがあります。

一方、コーカサスの三国から日本を見た場合に、特にアルメニアがそうなのですけれども、ほとんどの人々の目はロシアを含めた欧米を向いています。ですから、日本に対する知識はまだ、ソ連時代の教育である程度学んだ伝統的な日本文化と、それから技術の国というイメージだけが先行しています。どうもアルメニア人の頭の中にあるのは、日本の会社というのは「オフィスにコンピュータが並んでいて、その横で盆栽を育てている」という、非常に偏ったイメージで、正しい姿はまだ十分に伝わっているとはいえません。

これから日本の政府が留学生をもっとたくさん受け入れたり、文化や広報活動を盛んに行なったりすることが、両国の正しい認識および経済関係の発展にとって重要になっていくことと思われまます。

司会：今回取り上げた地域は非常に長い歴史とたいへん豊かな文化がある所です。それらはまだ十分に日本に知られていない所も多くあると思いますが、たいへん魅力的な文化・歴史を持っているといえます。

きっかけはシルクロードという抽象的なものからであっても、それぞれの地域や民族の違い、それらの文化や歴史の奥行きといったものを、今後もさまざまな形で皆様に紹介できればと考えております。皆様も、テレビや雑誌・新聞等、この地域を紹介するいろいろなメディアがありますので、そういったものを目にされたとき、「そういえば、こんな所があったな」ということで、関心を深めていただければ幸いです。最近では関連の書籍などもたくさん出ておりますので、どうぞ今日のシンポジウムをきっかけとして、この地域についていっそう関心を抱いてくださいますようお願いいたします。ありがとうございました。